ウィルソン教授　インタビュー

去る1990年9月，名古屋大学の招きでプリンストン大学のマーガレット・ウィルソン教授が来日され，京都大学においても「バークレーとデカルト主義」と題された講演をなさいました。京都滞在中，教授に対して編集部が行ったインタビューの内容を以下に掲載します。

マーガレット・ダウラー・ウィルソン（Margaret Dauler Wilson）教授はデカルト研究をはじめ，近世哲学史研究において現代アメリカを代表する研究者の一人で，著書に“*Descartes*”（1978），編著に“*The Essential Descartes*”（1969）があり，“The Phenomenalism of Leibniz and Berkeley”（1987）その他多くの論文を発表されております。

また，京都大学での講演では，デカルト流の科学的実在論に対するバークレーの批判を再評価されました。

——最初の質問は，教授のバークレー哲学解釈に関する質問です。教授はバークレー哲学の体系すべてを受け入れているわけではないようですが，彼の哲学のどの部分を肯定的に評価し，どの部分を否定的に評価なさっているのでしょうか。

おっしゃる通り，私はバークレー哲学の二つの部分を区別しています。一つは，デカルトやニュートンといった先行者に対する批判者としてのバークレーです。それは，私が総称してデカルト的科学的実在論と呼んでいるものに抗して，常識の弁護をかってでたバークレーでもあります。もう一つは，「存在するとは知覚されることである」という原理を提唱しているバークレーです。

科学的実在論の批判者としてのバークレーは，歴史的に重要な意義を持つことは勿論ですが，今日でもその重要性は失われていないと思われます。というのも，例えば，ロック哲学を弁護しているような人が現代にもいるからです。フランク・ジャクソンやジョン・マッキーは，彼等がロック主義と呼んでいる立場を守っています。それに，科学的実在論を現代において弁護している人々が，バークレーの反論，とくに「説明」の問題に関する重要な反論に，完全に答えているようには思えません。です

から，バークレー哲学のこの側面は，歴史的な問題としても，現代哲学に於ける問題としても，関心が持たれるのです。さらに，この側面に於けるバークレーは，デカルト，ロック，マルブランシュ，ボイル，ニュートンらの哲学的立場に反対しただけではなく，ライプニッツやカント的な立場にも反対し得るものであったことを付け加えておきたいですね。ライプニッツやカントは，ある意味で，先行者たちの間に普及していた科学的実在論を批判したと言えるのですが，私の見解では，彼等もまた科学的実在論者でした。勿論，別の意味では，彼等もまた観念論者でした。でも，私が考えるところでは，彼等は多くの点でバークレーよりもデカルト的伝統に接近していたのです。従って，私はバークレーを歴史上特異な人物として考えているのです。以上が，バークレー哲学の第一の側面です。

バークレー哲学の第二の側面，すなわち，「存在するとは知覚されることである」というテーゼを出したバークレーの内には，積極的な議論を見出すことは出来ないでしょう。直接知覚されるものは知覚の対象の観念であるという考えを，彼は先行者から単に引き継いだにすぎないように思われます。例えば，一般観念を論じるとき，彼はこの考えをあまり熱心には弁護していません。イアン・ティプトンやジョージ・ピッチャーのような注釈者も言っているように，『第一対話』の中に彼のこの立場を支持する積極的な議論が幾つかあるものの，彼の著作の中にはそれを支える実質的な基盤があまり存在しないのです。でも，ここにもバークレーから学ぶことができる興味深い議論が幾つか在ります。それらは，今日でも考えるに値するでしょう。

一つは，『視覚新論』での主張，すなわち，視覚の観念と触覚の観念はまったく異質のものであり，なんら共通のものを持たず，我々が同一のものを見ると同時に触れることはない，という議論です。これはバークレーの常識に反した側面と言えますが，それは少なくとも一つの議論によって支えられています。私は以前それを別の哲学者のグループと論じたことがあるのですが，大きな関心を呼びました。その議論というのは，二つの観念が同種のときに一方を他方に付け加えることができるのに，触覚の延長と視覚の延長を加えることができないという議論です。おもしろい議論でしょう。いろんな人が様々なことをこの議論の中に見出しています。私が言った，バークレーから学ぶべき哲学的に興味のある議論の一つがこれです。これと関連したもう一つの議論もあります。それは，『第一対話』に出てくる，一次性質の観念と二次性質の観念とは分けることができないという主張です。「色を見ることなく延長を見る

ことは出来ない」というのが，その一つの言い方です。この議論は，長い間，批評家たちの間ではあまり十分には考えられてきませんでした。でも，あなたたちも御存じかもしれませんが，数年前に出たコラン・マギンの『主観的見方』[1] という本の第六章は，二次性質の観念は一次性質の観念から分離不可能であり，まさに一次性質の観念であるようなものも常に二次性質の観念と結び付けられているのであるという，バークレーのこの立場を弁護していました。マギンの議論はたいへん興味深いものだと私は考えています。

また，バークレーの議論の中で今日なお有効な別の例もあります。きわめて概略的なものにすぎませんが，バークレーは，「力」といった科学的性質に対して道具主義的立場を取ることによって，彼の観念論を物理科学に適応させようと試みています。数学の哲学に関しても幾つかおもしろいことを言っていますね。最後に，『第一対話』の中で色に関して提出された知覚の相対性の議論も，私は非常に興味深く思っています。デイヴィド・アームストロングが，かつて，この議論についてきわめて共感的に，きわめて興味深く書いていました。私自身も『第一対話』のこの議論に関して論文を書いたことがあります。必ずしもバークレーのような哲学的立場を取ることなく，バークレーの観念論から何かを学ぶことができる議論だと思います。

——その二つの側面の関係について質問したいと思います。教授はこの二つの側面を切り離して相互に独立に扱い得るものとお考えのようですが，哲学者が先行者を批判する仕方と，その哲学者本人のポジティブな主張との間には切り離しがたい関係があるように思えます。この点についてどのようにお考えでしょうか。

確かにバークレーのもののような哲学体系は有機的に一つの全体を成しており，私のようにそれを二つの側面に分けることは不自然であるかもしれません。バークレーは「存在するとは知覚されることである」という原理に強い確信を持っており，この主張は先行者の科学的実在論に対する彼の攻撃と堅く結び付いています。そして，それは少なくとも常識の立場としての堅固さを持っていると思います。

しかし，知覚の対象が単に心に依存した心的なものであることを支持するバークレーのやり方は，私にとって何か納得できないものがあります。彼の最初の体系的著作『人知原理論』の中には，この主張を基礎付けるようなものはほとんどなく，そこで彼は，直接に知覚されるものが観念であることは一般に認められていると断言してい

るにすぎません。バークレーにとって直接の知覚は連合した知覚でした。例えば，家の外の馬車が出す音を聞くときに，私たちは単に音を知覚しているだけではなく，まさしくその馬車そのものを知覚しているというのです。しかし，そうした知覚も，最終的には，心から独立したものの直接の知覚なのではないとするのです。

私はこうした考えはバークレーに独特のものだと思います。というのは，彼の先行者たちが直接に知覚された観念というものを強調するのは，この観念をこえた実在を求めるためでした。こうした考えは，一次性質と二次性質を区別する考えと結び付いているのですが，バークレーはこの区別を否定しているのです。デカルトやその他の科学的実在論者が我々の知覚の直接の対象を心的なものとしたのは，物理的な対象自身が色とか音といった我々が直接に知覚する性質を持つということを否定するためでした。そしてこれらの性質は対象の側には存在しないのだから，心に依存するものだとされ，かくして知覚の直接の対象は心的なものであるとされるに至ったわけです。科学的実在論者がこうした結論に達するのは一応筋が通っています。しかし，一次性質と二次性質の区別を否定するバークレーが知覚の対象を心的なものとした科学的実在論者の主張をあっさり受け入れているのを見るとき，困惑を禁じ得ません。おそらくここにはもっと深い関連が潜んでおり，皆さんもそうした問題について議論を深めたいと考えていると思いますが，今はこれ以上のことは言えません。ただこの問題については私も本当に考えあぐねているのです。自分が批判している相手の立場を二つに分け，一方をとって他方を捨てるというようなことをバークレー自身もしているわけですが，彼が取り入れたもの，つまり，知覚の直接の対象が心的であるというテーゼは，彼が批判した一次性質と二次性質の区別の主張，物理的対象には感覚的性質は属さないという主張と分かち難く結び付いています。バークレーが一次性質と二次性質との区別を批判しながら，どうして知覚対象の心的依存性をあっさり受け入れたのかは，難しい問題だと思います。

——もう一つの問題，デカルトについてお尋ねします。最初の質問に対する教授のお答からすると，教授は科学的実在論の問題に関してはバークレーの批判を認めていらっしゃる。ところが，教授が以前に書かれた『デカルト』[2] という著書では，教授はそういう立場をとっていなかったと記憶しております。デカルトとバークレーに関して，立場の変化があったようですが。

そうですね。私は，あの本を書いていたときには，まさに科学的実在論に共感を持

っていましたし，セラーズのような人たちの影響を受けていました。そして，デカルトの科学的実在論の側面を強調することによってのみ，デカルトに共感的な解釈を与えることができると考えていました。つまり，デカルトを現代的な哲学の立場に近付けようとしたのです。こうした私の解釈は，デカルトの懐疑論だけをとりあげて強調するという従来の解釈と比べて，彼の立場をより近付きやすいものにしたと私には思われました。つまり，私は，彼の懐疑論を，感覚に基づいた世界観から離脱して，科学的実在論の世界観を確立するための戦略として解釈したのです。しかし，科学的実在論に対するバークレーの攻撃の中の幾つかの論点が私には説得的に思えてきました。ただそれは直観的にそう思えたのです。問題は二つありました。一つは，感覚的対象についての科学的実在論者の考えが，私には怪しいと思われ始めたことです。彼等は，例えば，カップを見るとき，見られているものの一部である形や大きさや運動といったものは実際に外にあって，その他の仕方で見られている色などは心の中にあるというのです。これが私にはとても奇妙に思われ，また大変私を困惑させ始めたのです。色・音・味・匂い・冷暖などは心の中にあって，外的事物は一見そうした性質を持っているように見えるけれども実はまったく持っていないのだと考えることは，世界に対する大変奇妙な見方であると思うようになりました。実際，これらの性質は世界の知覚にとってはとても重要なものではないのでしょうか。バークレーは，彼の論敵の考えに従うなら，すべての可視的な自然の美は単なる想像上の揺らめく炎にすぎなくなるではないかと述べていますが，私もまったく同感です。二つ目の問題は次のようなものです。デカルトおよびボイル，ロック，マルブランシュや現代の哲学者であるジャクソンやマッキーらも明白に受け入れている見解は，科学的実在論は我々の知覚経験を含んだすべての現象を一次性質によってのみで説明できる，というものです。しかし，デカルトは同時に，いかにして物質の中での運動が，それら自身とはまったく異なる何ものかを生みだし得るのか，我々は考えることは出来ない，ということを認めています。我々は一次性質が延長に即した形で他の運動を生みだし得るということは理解できますが，しかしいかにしてそれらがまったく異なるもの，すなわちまったく異なる本質を持つものを生みだし得るのかは理解することができません。しかしもちろんデカルトは，精神が身体の中にあって別のまったく異なった本質を持つものだということを否定してはいません。それゆえそこには，矛盾とは言えないにせよ，あるきわめて重大な緊張があるように思われます。そこでは一方で，あらゆる

ものが一次性質と機械論的体系のカテゴリーのもとで説明されており，そして他方では，いかにして運動や物質が異なった本質を持つものを精神のうちに知覚として生みだし得るのかということが説明不可能になっているのです。以上が，私がバークレーの思想のうちへと入り始め，彼の立場を支持しはじめるようになった，二つの根本的な問題です。多くの解釈者たちが，バークレーはデカルトやロックといった先行者たちの仕事を理解していないといって批判してきたわけですが，この批判は明らかに誤りであると思います。私はバークレーによるデカルトやロックへの批判に非常に共感を感じるのです。

——それでは次の質問に移らせていただきます。哲学史研究の方法論についてどのようなお考えをお持ちでしょうか。分析哲学者による哲学史研究に対しては，アナクロニズムではないかという批判がありますが，それについてはどうお考えでしょうか。

私としては哲学と哲学史との関係に関する多元論の立場をとりたいですね。言い換えると，現代哲学，つまり自分自身の哲学的見解を展開したり，擁護したりしている哲学研究と，哲学史研究との間には，これが唯一の関係だなどと言い得るものはないと考えているのです。

現代英語圏では哲学研究と哲学史研究との間の関係は非常にバラエティに富んだものです。デイヴィドソンなどのように哲学史をほとんど無視する人がいる一方で，デイヴィド・ルイスなどは哲学史を強く意識した上で仕事を進めていますし，ジョナサン・ベネットもそうです。J・ローゼンバーグもその中に入るでしょう。彼は，哲学者たるもの常に自説を歴史的なバックグラウンドと照らし合わせてみていかなければならないという考えを持っています。従ってかれは特に近世哲学や古代哲学についての詳細で膨大な歴史的分析を行っています。彼自身はとくにカントの影響を強く受けているようです。ベネットは自分の著作の中で常に哲学研究と哲学史研究とを結び付けているわけではありませんが，過去の大哲学者の研究を通して哲学研究を深めることができるし，自分自身の哲学的立場を持ち込むということは哲学史の解釈という目的にとっても有益であると考えています。

ところで，ローティ，シュネーヴィント，スキナーの編集による『歴史における哲学』[3] という本を知ってますか。そこには多くの論文が収められていて，それらは二部に別れています。第一部には哲学と歴史の関係について一般的に考察した論文が入

っており，第二部にはより個別的な研究が収められています。個別的な問題を扱った諸論文からも，哲学史が哲学の研究にどのような価値を持つのかについての，著者それぞれの確信が伺えます。第一部に含まれているチャールズ・テイラー，アレスデール・マッキンタイアー，ローゼンツ・クルーガーなどの人達の論文は，それぞれ哲学に対する歴史的アプローチの重要性を述べていますが，さらに踏み込んで，歴史的アプローチが哲学にとって本質的なものであるという考えを擁護しようともしています。この本はあちこちで論評されましたが，そのほとんどは，敬意はこもっていましたが批判的なものばかりでした。

私は，哲学における歴史的研究の意義をあまりにも強調するこうした試みが成功しているとは思いません。彼らの主張はあまりにも強硬で大胆に過ぎると思います。私自身，哲学は歴史的にもなされ得ると思いますし，優れた哲学史的研究から哲学的に興味深い仕事が現われることもあると思いますが，同時に私は哲学は歴史とは関係なくなされることもあるとも考えています。哲学史を知らないと，先人が犯した過ちを繰り返す恐れがあるという人もいますが，必ずしもそうとばかりは言えません。

私は哲学と哲学史との関係は柔軟なものであり，一つに固定されるようなものではないと思います。哲学の歴史は哲学そのものにとって必須であるという考えを取ることはできないと思います。もちろん基本的な哲学史的教養は重要であると思いますが，しかしだからといって，哲学史が哲学を創造することのために欠くことのできないものであるとは言えないと思うのです。他方，ギルバート・ハーマンのように，哲学史家は歴史学科に属すべきで，哲学科にいるものではない，という人もいます。彼とは友人ですが，この点に関しては私は彼の主張が正しいとは思えません。哲学史はやはり哲学の大切な要素であることに変わりないと思います。

まとめてみると，英語圏には哲学と哲学史の関係について大きく分けて二つの考えがあるといえるでしょう。一つは歴史的アプローチを重視する立場で，彼らは分析哲学者達の過去の大哲学者を論ずるやり方があまりにも歴史的センスに欠けており，アナクロニズムであると感じています。この分析派への批判は，大哲学者のテキストを精密に理解し，その歴史的・科学史的コンテキストをも理解すべきであるという要求と結びついています。このことと関連して，アメリカではデカルトやカントといった大哲学者ばかりでなく，彼らを取り巻くこれまであまり研究されてこなかったような哲学者にも関心がもたれるようになっています。ここで，こうした立場をよく示して

いるものとして，近く出版されるケンブリッジの『17世紀の哲学』の出版案内のなかで，D・ガーバーとM・エイアーが書いていることをまとめてみましょう。「先人から学ぶためには私達は彼らを歴史的言葉で理解する必要がある。彼らを理解することを通じて私達が現に取り組んでいる問題の成立を理解するためにも。」

これが現今のアメリカにおける哲学史に対する一つの見方です。もう一つの見方はしばしばジョナサン・ベネット(4)の名前と結び付けられています。彼は，今まで話してきた歴史派の人たちにとっては癪に触る人物のようです。ベネットの立場は次のようにまとめられるでしょう。「過去の大哲学者に対する尊敬の念は，ただ，彼らの本を読み，自分自身の哲学的関心と哲学的道具立てとをもって彼らと議論をするということを通じてのみ示し得るのだ。」

さて，ベネットが分析派の典型であるのは良いとして，それ以外の例を探すのは容易ではありません。でもおそらくカントの『純粋理性批判』のコメンタリーである『意味の限界』(5)を書いたストローソンや『ロックからの諸問題』(6)の著者マッキーがそれに当たるでしょう。これらの分析派の歴史解釈は，時として，彼らが考察の対象としている哲学史上の立場についてひどく歪んだイメージを与えることがありますし，それらの立場が実際以上に脆弱であるような印象を与えることがあるのは事実です。

私自身は先ほど挙げたケンブリッジの『17世紀の哲学』の出版案内で示されていたような考え方に共感を感じます。つまり，歴史的に正確な理解は，過去の哲学者から学ぶため，また，哲学的な議論を深めるためにも有用であると考えているのです。たとえば，コラン・マギンもバークレー自身の意図したところに忠実にバークレーを理解するという仕事をしています。

このように，私は歴史的な正確さ，歴史的なコンテキストに十分な注意を払うべきだと考えています。しかし，分析派の人々の仕事が哲学史研究に大きな貢献をしたことを認めるのにやぶさかではありません。彼らにはたしかに，歴史的コンテキストなどお構いなしといったところもありますが，しかし，テキストをひたすら哲学的に読むという彼らなりの仕方で重要な貢献をしてきているのです。私自身は，歴史的アプローチに共感を感じてはいるのですが，でも，はっきり歴史派の方に与するというわけではありません。歴史派から目の敵にされているベネットにしても，彼の哲学史的研究の中には不正確な点があるのは事実ですが，彼が過去の大哲学者の研究に多大の貢献をし，この研究分野に活力を与えた人であることも疑いがたい事実だと私は思う

のです。ですから，ベネットなどの分析派の人の仕事を，歴史意識に欠けるといって非難するのはどうかと思います。彼らは彼らの仕方で頑張っているのですし，その成果はとても有益なものなのですから。

また，最近では分析派と目される哲学史家の中にも色々なタイプがいることを付け加えておきましょう。分析哲学の研究者としても立派に仕事をしながら，哲学史の研究でも専門的な研究をするような人々が現われているのです。こういう人々は必要な語学を習得し，必要とされる専門的知識も身につけていますし，過去の哲学が矛盾を含んでいるように見える場合にも，より整合的に解釈する方法を探ろうとするような態度でテキストを読んでいます。ロバート・スレーやベンソン・メイツ(7)，またロバート・アダムスなどがこれに当たるでしょう。彼らは三人ともライプニッツについての優れた仕事をしています。またスピノザについて最近本を出したアラン・ドナガン(8)も，近世初頭の哲学史の分野で優れた仕事をしています。これらの人々はそれぞれの哲学者についての研究で，紛れもない専門家であり，そして同時にすぐれた分析哲学者でもあるわけです。

——それでは，最後の質問です。教授は現在，科学的実在論にかなり批判的であるようです。それでは教授は科学理論の成果をどうお考えになるのでしょうか。

私は反科学主義者ではないということを確認しておきたいと思います。ですから，17世紀や18世紀の哲学者が仕事をしていた頃の科学の状況に興味がもたれてきたことはたいへん良いことだと思います。また，私が大学院の学生だった頃と比べて，哲学者はもっとよく科学の勉強をするようになっています。科学の勉強はほとんど哲学の一部になっています。たとえば，知覚の問題を論ずるときには生物学やコンピューターサイエンスの研究をするのは当然のことになっています。

科学と哲学との協力を通じて，将来もっと説得力のある科学的実在論が誕生する可能性は在ると思います。しかし，哲学も科学もそれ程には成熟しておらず，まだ道は遠いといったところではないでしょうか。いずれにしても，この領域で何かを成し遂げようとすれば，哲学者も科学者も鋭い感受性を要求されるのは確かです。

註

(1) Colin McGinn, *The Subjective View : Secondary Qualities and Indexical Thoughts*, Oxford University Press, 1983.

(2) Margaret Wilson, *Descartes*, Routledge & Kegan Paul, 1978.

(3) Richard Rorty and others (eds), *Philosophy in History*, Cambridge University Press, 1984.

(4) Cf. Jonathan Bennett, *Locke Berkeley Hume*, Oxford University Press, 1971.

(5) Peter Strawson, *The Bounds of Sense : An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Methuen, 1966.

(6) John Mackie, *Problems from Locke*, Oxford University Press, 1976.

(7) Benson Mates, *The Philosophy of Leibniz*, Oxford University Press, 1986.

(8) Alan Donagan, *Spinoza*, University of Chicago Press, 1989.

<後記>

お忙しい中をインタビューに快く応じて頂いたウィルソン教授，並びにお世話下さった名古屋大学助教授の山田弘明氏に感謝します。また，インタビューの企画・実行に協力して頂いた安藤正人氏，鬼界彰夫氏，倉田　隆氏，浜野研三氏に感謝します。なおこのインタビュー記事の文責は編集部にあります。